

ポートランド国外調査研修を終えて
期間：2014.8.23～8.31
報告者：石川県能美市 嶋田准也

ポートランド住民の主体性



プログラム初日は、研修生がチームに分かれての市内探索であった。チーム PUB (山本、山川、相場、嶋田) は、ACE ホテルに始まり、マーケット、Velo Cult (自転車店)、Sunday Parkway という自転車のお祭りの場所などで、ポートランド住民約 30 人にポートランドの住みやすさについてインタビューを行った。

特徴的によく聞かれた言葉は progressive (進歩的) と sustainable (持続可能性) という言葉。特に progressive やリベラルといった考え方の人が多く、他から移住してきた人は、人のパワーがポートランドにはあると感じていた。一方で、保守的な人にはやや住みづらいという言葉も聞くこともあった。インタビューでは当初、質問を決めていたのだが、チーム全体として、途中からインタビュアーの発言の言葉について、深く掘り下げる形を取り、より対話を重視したものとしたら、より深い発言が引き出せたのも収穫だった。

最後のインタビュアーが「make government heard」という言葉を使って、「(私たちが) 行政に話を聞かせる」という言葉が印象的だった。まず自分たちが主体となって、行動するという意識を感じた瞬間だった。

こういった主体性は、その後のプログラムでの住民のパネラーからも、それぞれ感じることとなる。彼らは、環境保護だったり、マイノリティの立場だったり、ビジネスの立場だったりするが、それは、個人の身近な問題からスタートしており、それが社会的な活動となり、結果的に市の為に行っているように見える。彼らは、行政に対しては基本的には信頼感を持っているが、黙っていても何もしてくれないことを知っている。行政は、なかなか意見を聞いてくれないとも言っていた。だから続けて声を出し続け、主張し、行動を起こす。そうやって行政に自分たちの問題にかかわらせるのだと。



市民と行政の関係、行政の関わり方

今回の研修では、ポートランド市、メトロ、トライメットなどの行政職員の方にもお話を伺い、行政側の姿勢や考え方にも触れることができた。ポートランド長期計画やアーバングリーンとメトロ、トライメットの事例でも、各プロセスに多くの市民が関わり、情報を共有し、図解などわかりやすい説明を心掛けて、話し合いを進めている。そして、その変更内容を再度市民に確認するなど、徹底的に市民の声を反映する仕組みを作っている。そして、職員は組織としてだけでなく、人と人、個人的な信頼関係を作り、彼らの声を集めていることである。



さらに、ポートランドでは、オフィス・オブ・ネイバーフッドインボルブメント（ONI）と呼ばれる、市とネイバーフッドとの橋渡し役の部署では、マイノリティが意見を言えるよう人材育成プログラムを行い、BPS（都市計画及び持続可能性対策局）でもプランの内容について、公平性に関する専門委員会を設け、プランが多くの人に反映できるようにしている。

日本では、委員会やワークショップを開き、意見を聞いてそれでお仕舞、というようなプロセスとは全く異なっている。「住民の声を聞く」ということはどういうことか、日本ではいかに表面的なことで終わっているかを感じた。そしてなぜそうしたできるかといえば、当初行政で想定したものがあつたとしても、住民が意見を言い、変更することを行政が受け入れているからである。トライメットのヘイスティング氏が「住民のアイデアを信じて進める」という言葉からもその姿勢は見えるし、そういった住民の声を聞くこと自体、新しい通常（New normal）をつくるチャレンジであるとも言っていた。

各種計画やプロジェクトの各プロセスで住民の意見を聞くポートランド。そこで重要なのが、行政が市民の意見を聞くための準備や姿勢である。対話を重ね、信頼を得ることはもちろん、そのために、透明性や説明責任という言葉で言われるような、情報やビジョンを共有し、資料を準備し、きめ細かなわかりやすい資料や計画案の工夫、市民の意見を反映させる調整力が市の職員、組織に必要だと感じた。事前研修の時にチップス氏は「まちづくりはダンスのようなもの。時にはリードし、時には一緒に行く。」旨の言葉を言ったが、各プロセスにおいては、市民のほうがリードし、行政がそれについていくくらいの感覚もあった。そのくらいの姿勢があることで、住民は行政に声が届くという感覚をもち、前述のような主体性を持った市民が多くなっていく相乗効果もでるのだと感じた。

まとめ

個人的な研修のハイライトとしては、ピアストーミングのときに”コーチ”の Dan に「集めた意見はすべての人の意見ではない。意見が反映されていない人は誰かを意識しなさい。そして、意見が反映されていない人がどこにいるかを知るために、地域を知りなさい」と言われたこと。早い段階で言われたことでその後のプログラムの話を聞く理解が深まったし、JaLoGoMa マスコットのように、まさに think out of the box な感覚があった。

ポートランドは、住民と行政が対話を重ねてきた歴史があり、その積み重ねがポートランドの成長につながっている。この研修で学んだことはすぐに地元でできないかもしれないが、その考え方を一つでも多くやってみること。そして住民を信頼すること。少しずつでも変えられるよう努力したい。

最後に、多くの気づきをさせてくれ、日米の違い、ポートランドの住民参加の感覚を体感させてくれた PSU の西芝教授をはじめ、ダン氏、チップス氏、プログラムスタッフのみなさん、東京財団に感謝したい。

